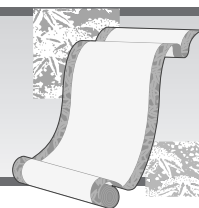


軍記物語の女性たち (13)

横笛の生涯 —『平家物語』より—

岡崎 嘉彦



横笛は平清盛の娘建礼門院に仕える雑仕女で、今様や朗詠を始め、琴や琵琶、和歌にも秀でた女性であった。ある日、清盛が開いた宴で横笛は舞いを披露することとなり、その艶美な舞姿を見た平重盛の家臣斎藤時頼は横笛に想いを寄せ始め、やがて二人は恋に落ちていく。時頼にとって横笛はかけがえのない存在となり、また、彼女の心も時頼以外の男と結ばれる道はなかったのである。このように、二人は深く愛し合うようになり、絶えずお互いを想い続けていくようになる。しかし、時頼の父茂頼は息子が、身分の低い横笛と愛し合っていることを知り激しく怒り出す。時頼は父と愛する横笛の間で苦悩の日々を過ごすことになる。やがて、時頼は嵯峨の滝口寺で出家し、父と横笛を裏切らない唯一の選択をする。

それを知った横笛は愛する時頼に一目会いたい一心から、嵯峨へと向かう。必死の思いで時頼がいる寺へ辿り着くも、時頼は胸が張り裂ける思いで、同宿の僧に帰るように伝えてくれと頼む。横笛は自らの想いを伝えようと

山深み 思い入りぬる 紫の

戸のまことの道に 我を導け

という和歌をしたためる。これを見た時頼は、再び来られたならば横笛を拒む事ができないと思ひ、女人禁制の高野山へ移る。横笛は自らも出家して尼となり、時頼と同じ仏道の世界へ入る。しかし、時頼と逢えない哀しみからか横笛はその儂い生涯を終える。これを知った時頼は哀しみを胸に秘め仏道を極める修行に励み、遂に俗世から離れ、修行を極めた高野聖となる。しかし、彼の心の中は生涯で唯一愛した女性への想いを断ち切ることが出来たのだろうか。

このように『平家物語』の「横笛の章」は、

平家の全盛期に生きた二人の悲恋の様相が綴られている。横笛は悲しい人生を送った女性であった。時頼と恋に落ち、生涯共に生きようと心に決めていた。しかし、脆くもその想いは打ち砕かれ、彼女は逢えない時頼への想いを募らせる。

男性の多くが側女を持つ時代であって、他の女性を愛することなくひたすら自分だけを愛し、人生を捧げてくれた時頼の誠実さと一途な想い、また、時頼が出家して仏道に入ったことを知りながら、それでも愛しい人への想いを断ち切れず、心から逢いたいと思う横笛。時頼にすれば、自分を求めひたすらにすがってくる横笛に心を打たれるなど、お互いに一層の愛しさを感じたことであろう。

時頼に一目逢いたいと望んでいた彼女だが、そのささやかな想いが叶わないと知ると時頼と同じ道を選んだ。逢えないならせめて仏道で心だけでも繋がっていたいという彼女のせめてもの願いだったのだろう。しかしながら、横笛は尼となった後すぐその短い生涯を終える。時頼の事を想いながら川に身を投げたとも、病に倒れたとも言われている。彼女にとって時頼は生きる上で人生の全てであったのだ。恋に生きた女性横笛が辿った運命、それは儂さと愛に満ち溢れたものであった。一人の若い女が求めた実らぬ愛は、来世で必ず築きあげてくれたことと思う。

■主な参考文献、そして、今回おすすめする本

○木下順二著『平家物語：古典を読む』岩波書店
2003年。(岩波現代文庫) 913.434-Kin

おかざき よしひこ(司書・情報サービス課)